



2014 6 June

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	1	2	3	4	5



もう何回、太陽を見ていないだろう。
空覆う曇天と降り続く雨には、狐たちでなくとも鬱々とした気分になる。
宿の女主人に頼まれた使いも、いっそ忘れたことにしようかと思ったその時。
「レオンさん!」
「……フレイ」

雨に濡れた傘から覗いた笑顔。思わず、破顔する。
出かけるならこれを、と、差し出されるままに傘を受け取り、
ふと、妙なものがぶら下がっていることに気がついた。
揺れる、ふたつの白い人形。形状から察するに、これはもしかして…。
「特製でてるてらぼうずです! 私とレオンさんですよ。可愛いでしょう?」
何故俺たちなのか。内心首を傾げたが、不思議と悪い気はしない。
「……よくわからんが、ありがとう。」
ところで、俺はこれから雑貨屋に使いに行くんだが、アンタも一緒に行かないか?
傘の礼に、何か買ってやるぞ。
いつも町中を走り回っている多忙な姫のことだから、きっと断られるだろうと
思っていたのに、少女はたいそう嬉しそうに、にっこり笑って頷いた。

瞬間、胸裡に射すひかりとぬくもり。

ああ、なんだ。
太陽なら、ちゃんとここにあったじゃないか。